

---

# 魔法少女マジカルゆたか 第0話

かがみん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女マジカルゆたか 第0話

### 【NZコード】

N2327M

### 【作者名】

かがみん

### 【あらすじ】

らき すたのゆたかがなのはだつたら…といつ一次創作

「これって変な生き物なの！？」

…………

目覚ましが朝の静寂を破つて響いた。

「んー…………」

小さな手が、時計の音を止める。

「んん…………」

布団の中で小早川ゆたかはもぞもぞと身動きした。  
ゆたかは、ゆっくりと上半身を起き上がらせた。

柔らかいセミロングの髪に、あどけない顔立ちの少女である。

「ふあ～…………」

大きく伸びをして、ベッドから降りる。

洗面所に向かい、顔を洗つて歯を磨く。

それから部屋に戻つて着替えを始める。

小学生とも見紛う小柄な少女だが、クローゼットから取り出したのは埼玉有数の進学校、陵桜学園の制服であった。

「うんしょ

冬服の袖に腕を通す。ひんやりとした感触にゆたかはちょっと、びっくりした。

洗面所で髪をツインテールに結つと、キッチンに入る。先ほどから、いい匂いが鼻腔をくすぐついていた。

「おはよう、ゆーちゃん」

台所で朝食を作つていた泉 こなたが振り向き様に言つた。

「お姉ちゃん、おはようー！」

元気に挨拶するゆたか。

お姉ちゃんと呼んだが、一人は血の繋がつた実の姉妹ではない。  
ゆたかはこなたの従姉妹で、今は陵桜学園に通うため、この泉家に居候中なのだ。

「うわあ。美味しそう～

ゆたかが歓声を上げる。

こなたとゆたかは、まつたりと朝食をいただく。

ゆたかは学校へ行く用意を整え、戸口に立つた。

こなたは朝食の後片付けけやらゲームやらで、学校に行くのがちょっと遅くなる。

最も、クラスメートのつかわやその姉のかがみとちやんと会流できるように動いているが。

ゆたかは笑顔で、鞄を片手に泉家を出た。

冬の冷たい大気が、頬を撫でていく。

うわ、寒い。

ゆたかはコートの襟元をしつかりと合わせた。

糟日部駅まで歩いていく。

「今日も良い天気」

天を仰ぐと、真っ青な空が、目に染み入るように映つてきた。

綺麗な空だと、ゆたかは思つた。

なんだか、心が浮き立つ感じがした。

今日は、何かが起こる……そんな予感がした。

## これって変な生き物なの！？ - 2 -

登校したゆたかは、陵桜学園でごく普通に、何事もなく過ごしていた。

そして　昼休み。

「たまには、屋上に行つて食べよつよ」と、クラスメートの田村ひよりが提案してきた。ひよりは長い黒髪の眼鏡つ娘である。

「それはいいですね！」

そう、賛意を示したのは金髪の留学生パトリシア・マーティンだった。ゆたかも特に断る理由もなかつたので、ひよりたちに同意して頷いた。

三人はお弁当を抱えて屋上へと足を運んだ。

晴れ渡つた空は青く澄んでいて、綿あめのような白い雲がふわふわと浮かんでいた。微風が優しく頬を撫でてくる。

三人は屋上に備え付けてあつたベンチに適当に腰を降ろし、食べながらお喋りをした。

「ユタカは何か将来やりたいこととかはありますか？」

「それは、夢つてこと？」

ひよりの言に、パティは「イエース」と答えた。

「んー……将来の夢かあ」

ゆたかは考え込んだ。おにぎりを見つめながら難しそうな顔をする。

「私は、まだ何にも考えてなかつたよ。パティちゃんは？」

「ワタシは勿論、萌え研究家デエす！－」

手を広げて熱く答えるパティ。

「け、研究家？」

「日本の萌え文化を解き明かして、アメリカ全土に萌えの素晴らしさを伝えるのがワタシの気高き使命なのデス！」

パティは力説。ゆたかは気落とされ気味だ。

「た、田村さんは」

「私はメジャーな大漫画家かな」

そう言って、絵を描く仕草をする。

「まだまだ精進が必要だけだ」

「二人ともいいなあ。ちゃんとやりたいことがあって……得意なものがあるし」

「いや、まあまだ一年生だし私達。捕らぬ狸のナントカってやつよ少し落ち込むゆたかを励ますようにひよりは言った。

そこへ、ひゅつと、何かが飛来してゆたかの顔に当たった。

「！」

「一体、何者が何を投げつけたのか……！？」

## 「これって変な生き物なの！？」 - 3 -

ゆたかの顔に、ハムの切れ端がベチャリと当たつて下にずり落ちた。

「……パトリシアさん？」

ゆたかもひよりもぽかーんとした顔つきになつた。

パーティは叫んだ。

「ナニを言うのデスか！ ゆたかにはタクサンの萌え要素があるじやないデスか！」

パーティは捲し立てた。

「ユタカなら、立派な萌えアイドルになります！ ノナタもそう言つてましタ！」

ゆたかは困惑した。

「……そりや、小早川さんなら

特定の人種には間違ひなく受けるだらうけど……」

ひよりは小さな声で呟いた。

ゆたかは無論、その言を否定した。

その後、みんなで和やか雰囲気の中、昼休みは終了し、午後の授業が平穏に過ぎ去った。

夕方になり、ゆたかは友人達と話をしながら泉家への帰途についた。夕陽を浴びながら、ゆたかは一路、糟口部駅へ向かう。

騒動も少しあつたが、おしなべていつもと変わらぬ平凡な日常であった。

ある出来事いまでは。

そして、下校の時間になった。

「じゃあ、明日またね」

バス停で友人達と別れ、ゆたかは一人、歩いていく。夕暮れの商店街を抜け、人通りの少ない道を進んで、公園の前を通りかかった。

その時。

(……?)

ふと、誰かに呼ばれたような気がして、ゆたかは立ち止まつた。だが、勿論彼女を呼び止めた者など誰もいない。

(なんだろう、今の……)

首を傾げつつ、再び歩き出す。

と、また同じ感覚に見舞われた。

(やつぱり、私を……呼んでる?)

ゆたかは周りを見回した。が、特異に思えるものは見当たらなかつた。

(気のせい、なのかな)

そう、考えた時だった。

(助けてー)

強く悲鳴が脳裡に響き渡った。

「えつー!？」

(誰か……助けてー!)

はつきりと声が聞こえた。

まさか、幻聴？

そう思いながらも、ゆたかは声の主を捜そうとした。

(公園?)

その方向から、何かの気配を感じとつていた。その正体はわからな  
いが、なぜだかそこへ行かなくてはいけないと思った。

ゆたかは公園の中に足を踏み入れていった。

何かが始まるかもしれない、という、恐れにも似た予感。  
ゆたかがたどり着いたのは、公園の雑木林であった。  
ゆたかは焦慮を覚えながらも、木立の間を歩いていった。

そして。

進んだ先で、道は、一手に分かれていた。



## 「これって変な生き物なの！？」 - 4 -

ゆたかが左の道を緊張しながら歩いて行くと、小さな生き物が、弱々しく地面に横たわっている光景が見えた。

「……猫、じゃないよね？」

自問しながら、恐る恐る近づいた。

黄色い毛並みの、小さな動物。ゆたかは、テレビで見たイタチに似ていると思った。

イタチ（らしき生き物）は、目を閉じてぐつたりとしている。  
「これなんだろ、宝石……かな」

イタチの首元には、赤くて丸い珠が、首輪に付いていた。

赤い珠は、不思議な光沢に輝いている。

「怪我してるのかな」

ゆたかが気になるのは、イタチの様子だった。そつと、両手で掴んで、持ち上げる。

小さく、愛らしい動物であった。

「そうだ、この子、誰かのペットなのかも」

ひょっとしたら、飼い主が心配しているかもしね。

「……エリコみ」

やつ口こじながらも、ゆたかの心は決まっていた。

ゆたかは街中を彷徨い、獣医の看板を見つけた。

ゆたかは、「ここだ」と思い、その獣医の元に駆け込んだ。

「す、すみません。この人、怪我してゐみたいなんですか?」

若い女性の獣医さんが、詳しくイタチを検査した。

「怪我は軽いわ。むしろ衰弱してゐるのが気になるわね」

「あの、治ります?」

「栄養のある食事を『食べてお休み休ませれば、元気になるわよ』  
獣医さんは安心させるように、笑みを浮かべた。

「よかつた……」

「でも、この子、どうのつかしく」

「わかりません。道端に倒れてて……」

「飼い主に虐待されていたのを逃げ出したのかも」

「そんな……」

「衰弱してゐるのも、飼い主が餌を『えなかつたから、とも考えられ  
るしね。それにしても……」

獣医さんはイタチの首元の、赤い珠に目をやつた。

「田口かしり。やつぱつお金持ちの飼い主なのかな」

「ああ……」

「とにかく、今日は私の所で預かるから、貴女は明日見に来なさい

「はい。先生、よろしくお願ひします」

獣医さんは「任せし」と、頷いた。

その晩。

ゆたかは奇妙な夢を見た。

金髪の少年が、真っ黒い怪物と戦い、傷つき、敗れるところ内  
容だ。

少年が苦痛の表情を浮かべて倒れたところで、目が醒めた。

「……」

今まで見たことがなかつた夢。

こなたに見せられたアニメの影響かな、と思つたが、それにしては  
あまりにリアリティーのある夢だつた。

「せういえば、あの子、元気になつたかなあ」

獣医に預けたイタチを思い出した。

「飼い主が見つかっても、虐待されたら困るよね……いつものこと  
家で飼つちゃおうかな……」

おじさんやお姉さんは承知してくれるかな?

その時。頭の中に声が響いた。

「…」

『……助けて…』

「うの、声」

あの時の……!?

ゆたかはハッとなつた。

そして、田を閉じて、意識を集中、声をもつとよべて聴きいつとした。

(あなたは誰なの?)

心で呼びかける。

(僕の声が聞こえたんですね。よかつた。よつやく通じた……)

(前にも、私に声かけたよね)

(お願いがあります。助けてください)

(助けるって……何を?)

ゆたかは困惑して訊いた。

(早く、アレを 止めなければ、この世界が……)

焦った声。

(何があつたの? それに、あなたはいまどこにーっ)

(うわあああーー)

(ー? )

ゆたかの脳裏に、閃光の様に映像が弾けた。

薄暗い、獣医院の室内で、小動物が黒い塊に襲われている

目の前で見ている様にありありとその光景が網膜に浮かんだ。

小動物 イタチは怪物から逃れ、窓から外へと飛び出した。  
イタチはゆたかに叫んだ。

(早くーー)

その瞬間、声は途切れた。



## 「これって変な生き物なの！？」 - 5 -

しばらく部屋の中立ち廻っていたゆたかは、パジャマを脱ぐと私服に着替え、じつそつと家を出た。

一路、獣医へ。

走る間にも、意識での呼びかけを続けた。

（大丈夫なの？）

（時間が、ありま、せん。あいつを早く……封印……ひひひ）

ゆたかは、黒い怪物の姿を思い起した。

（あれは何なの？）

（災厄です。僕の掘り起こした……だから、僕が何とかしないと……でも、今の僕では……）

（と、とにかく！ すぐにそつちに行へからーー！）

（すみません ）

ゆたかは必死に走り、やがて夕方に訪れた獣医に到着した。

獣医の前で立ち止まり、様子を確かめる。表からは、とても静かで、とても異変など認められなかつたが……。

ザワザワザワ……

風が木々の梢を揺らす。

その時。

おずおずと医院の中に入ろうとしたゆたかの耳に、ドンッ……とう、なにかが破壊されるぐぐもった音が聞こえてきた。

「な、なにっ！？」

ビクッとしながら、医院の中庭へ。

音はそこから響いてきたのだ。

医院の敷地内には、樹々が植えられ、ちょっとした庭園が作られている。昼間なら美しい落ち着いた癒しの場所なのだろうが、闇夜のなかでは不気味な空気が漂っていた。

いきなり、樹の何本かが、ベキベキと音をたてて倒れた。その木の破片を撒き散らしながら、漆黒の化物が飛び出してくる。

「うひやああー！」

ゆたかは悲鳴をあげた。

「あ

怪物に追われる様に、ゆたかの前にイタチが跳んできた。ゆたかは両手を差し上げ、腕をイタチに伸ばした。

イタチはどうにか、ゆたかの両腕のなかに着地する。

「グルグルグル……」

黒い怪物は、獰猛な吠え声を唸りたてた。

「う、嘘……」

ゆたかは恐怖に後ずさつた。膝が震えた。

「お化け……」

「あの〜、大丈夫ですか」

イタチが、心配そうに話しかけてきた。

「しゃ！ 嘰つた ー？」

「うわーーー！」

ゆたかは思わず、イタチを投げ飛ばした。彼は樹の幹に衝突し、内蔵が引つくり返るような衝撃と痛みを味わった。

「ぐふうーーー！」

「ああーーー！」めん

「い、いえ。うちうーーー助けて……いただいて……ありがとう……」

「ぜいぜい……」

なんだか虫の息であった。

「それより、事情を……」

「うそ」

「つー、危ない……」

彼は鋭く叫んだ。

怪物が跳躍し、ゆたかへと襲いかかってきた。

「きやあああつ……」

ゆたかはイタチを抱えて、逃走した。  
その背後から怪物が狙つて追いかける。

月光に照らされ、怪物がおぞましい姿を現した。

巨大な闇の塊、といった風体で、まるで山のような威圧感を放つて

いる。  
赤い瞳が爛々と燃え、大きな口を開いて威嚇していた。

細長い触手が体から生え、それを鞭の様に振り回す。

しかし何といつても恐ろしいのは、巨体を使った体当たり攻撃である。

「きやあ……」

寸でのところで、怪物に押し潰される危機を避けたゆたかは、医院から脱出しようとしました。

怪物は医院の外壁にぶつかって、コンクリート壁を粉々に破壊。派手な音をたて倒壊した瓦礫の雨を浴びて怪物が埋まつた。辺りはしんど、静まりかえつた。

「死んじゃつた？」

「いや、あれくらこじや……」

イタチは首輪についていた宝玉を示し、

「これを受け取つてください」

「宝石？」

ゆたかの手のなかで、赤い宝玉が輝いていた。

「僕には魔法を使うにも、魔力が足りません。それで、替わりに、あなたに魔法を使ってもらいたいんです」

「魔法？」

きょとんとして、ゆたかは訊いた。

……魔法なんて、実在するの？

「はい。魔力が回復していない僕では、デバイスを持っていても宝の持ち腐れですから……」

「でも私、魔法なんて……」

「大丈夫。僕の声を聞くことができたあなたなら  
ライジングハートを……」

きっと、この

「ライジングハート？」

ゆたかは掌中の赤珠を見た。

これって変な生き物なの！？ - 6 -

ドガアーン！！！！

瓦礫の山を弾き飛ばし、怪物が起き上がってきた。

「グオオオオオオオオ！」

「來たつ  
……」

「ふわわっ！？」どうするの？

「僕の言う通りにして。まず、精神を澄ませてみて」

ゆたかは田を暝り、  
宝玉を握りしめる。

「僕の唱える呪文と一緒に復唱して」  
パスワード

卷之三

ゆたかは祈るような仕草で、腕を上げる。

## 迫り来る闇の塊。

天へと手を掲げ、詠唱する。

「我、使命を受けし者なり」

」

「わ、われ、使命を……受けし 者なり

……」

たどたどしく、ゆたかは彼の言葉を復唱した。

「契約のもと・その力を解き放て！」

「風はソーランに・星は天井に」

「不屈の口アは」の胸にいやつ！？」

バシュウウウ……！

『warning』

赤い宝玉が虹色の光を放つた。

「起動を失敗した！？」

パスワードを唱え間違つたせいで、ライジングハートの制御機構が暴走、爆発が生まれた。

「きやあ！」

「うわあー！」

「グガアア」

放射状に魔力が爆散し、地面に巨大なクレーターを造り上げた。吹き飛ばされたゆたかは、痛みを堪えて立ち上がると、イタチを探した。

すぐ近くに倒れていたのを助けだし、

「ど、どうしよう

「とりあえず、もう一度やってみよう。今度は間違えないようにゆっくりと、ね」

「うん、気をつける」

やり直し。

起動用呪文

パスワードをゆたかは朗々と唱えた。

契約のもと・その力を解き放て・風は空に・星は天に・そして不屈の心は・この胸に

『『この手に魔法を……ライジングハートセットアップ……』』

二人の声が重なった。

起動成功。

ゆたかの掌から、眩しい光の柱が昇った！！

「やつた、成功だ。それにしても、なんて魔力だろ！」

イタチ 異界から来た少年は、ゆたかを見上げて、感嘆した。

「どうしたら……」

「魔法を制御する杖と敵から身を護る防護の服をイメージするんだ  
！！！」

「ふええ。そんなこと言われても……」

目を閉じたゆたかの脳裏に、閃くものがあった。

「一。」

それは杖と服のイメージ。

「とにかく、これでやってみるよ」

ゆたかの掌から、インテリジェンス・デバイスが真の力を解放する。

そして

「！」



「これって変な生き物なの！？」

- 7 -

ゆたかは赤面した。

「えええええっ！？」

彼女の服が次々と消滅し、下着まで光に分解されていった。つまりは、すっぽんぽんな状態なのである。

「やだっ」

その間にも、赤い宝玉は着実に変型を行っていた。

パーツとパーツとが合体、連結し、魔道士の杖へと生まれ変わる。

その杖の柄を、ゆたかの手が掴んだ。

すると

びゅびゅびゅびゅびゅ つ！…！

と、裸体に光が絡まり合いながら、白とペインクを基調にしたワンピースが装着されていく。

ツインテールを結ぶリボンもピンクの物に変換されていた。

杖持つ姿で、地面に降り立つゆたか。

「はうー！なに？何なのこれ！？」

ゆたかは、自分の「スチュームを見て狼狽える。

そこへ、唸り声をあげて、怪物がゆたかの前に立ちはだかった。

「ふ、ふえ……」

青ざめた表情で、ゆたかは怪物に相対した。泣きそだつたが、しかし、杖からは、力強い意志が伝わってきていた。

戦え、と。

『わ、私が？』

迷いを含んだ思いを乗せて、一陣の風が夜天に吸いこまれていった。  
……

魔法少女マジカルゆたか

第0話・終わり

魔法少女マジカルゆたか 予告編！！

君たちに最新情報を公開しよう！

ジユエルシードの捜索に協力することになった小早川ゆたか。しかし、その前途は多難であった。

次回、魔法少女マジカルゆたか第1話 魔法少女暁に死す！！

執筆予定全くナッシングでファイナルフュージョン承認！！！！

「これって変な生き物なの！？」（後書き）

「これでお話は終わりです

次回を書くことは今のところ予定ありません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2327m/>

---

魔法少女マジカルゆたか 第0話

2010年10月10日08時04分発行